

20231124 「SDGs はアヘンだ！」 人新世の「資本論」！

「SDGs は、『大衆のアヘン』である！」この少々衝撃的な言葉を皆さんは耳にしたことはないでしょうか。2021年の新書大賞で第1位を受賞し50万部超のベストセラーにもなった、経済思想家 斎藤幸平さんの「人新世の『資本論』」で語られる言葉です。この本は、ドイツをはじめ多くの国でも翻訳版が大ヒットしているといえます。

SDGs がアヘンである根拠を氏はこのように述べています。

「温暖化対策として、あなたは何をしているだろうか。…エコバッグ…マイボトル…ハイブリッドカー…はっきり言おう。その善意だけなら無意味に終わる。それどころか有害でさえある。なぜだろうか。温暖化対策をしていると思いつくことで、真に必要なとされているもっと大胆なアクションを起こさなくなってしまうからだ。」

そして、エコであると推奨されている様々な取組に対し、

「良心の呵責から逃れ、現実の危機から目を背けることを許す『免罪符』と断じています。そして、

「SDGs は、(政府や企業にとって) アリバイ作りのようなもの」「目下の危機から目を背けさせる効果しかない」

と糾弾の手を緩めません。

どうして氏はこんな一見ラディカルな主張をするのでしょうか。その理由は、続きを読み進めれば一目瞭然なのですが、一言で言うならば、「今の地球はそんな悠長なことを言っている場合ではない」「危機感がなさすぎる」「何が問題の本質なのか本気で考え、行動しようとしなさい」という筆者のぎりぎりの危機感が根底にあるからです。

著書の題名にある「人新世」とは、21世紀に入ってから新たに提唱され

ている地質学の新しい時代区分です。地質学における時代区分は、大きなものから「代」、そして「紀」、さらに「世」と細分化されて捉えます。恐竜が生きたとされる「中生代」とか「白亜紀」とかは、私たちにも馴染みがあるのではないのでしょうか。そして「新生代・第四紀・完新世」から私たち人類の活動は始まり現代まで続いているとされてきました。しかし、産業革命以降の約 200 年に人類が地球環境にもたらした影響はあまりに大きく、「完新世」は、もはや人類中心の「人新世」と認識を変え、新しい時代区分として捉え直さなければいけないのではないかと提唱されました。2000 年のことです。この時代区分自体は、国際地質学学会に公式に認められているものではありませんが、人類が地球環境にもたらした負の側面が、新しい時代区分として捉えられるという考え方が、SDGs の推進とも深く結び付くこととなります。

筆者は、

『『人任せ』では、超富裕層が優遇されるだけだろう。だからよりよい未来を選択するためには、市民一人一人が当事者として立ち上がり、声をあげ、行動しなければならないのだ。そうはいっても、ただ闇雲に声を上げるだけでは貴重な時間を浪費してしまう。正しい方向を目指すのが肝要となる。』

と語り、危機の原因のカギを握るのは資本主義であるとし、それへの対応として「資本論」を新しい視点で展開します。

こういう話になると、すでに小学校教育の範疇を大きく超えてしまいます。しかし、こうした主張の根にある思いや考え方は、私はまさに、

「何かの犠牲の上に築かれる豊かさを私たちは持続可能とは呼ばない」

「他人の不幸の上に、自己の幸福を築くことはしない」

ということなのだと思います。筆者の言うように、SDGs を流行のよ

うに語り、小手先の実践をして自己満足して収まってしまいうのでは、実際的に問題解決をすすめることにはならないというのは確かにそうかもしれない。しかし、気候変動を食い止めるのに、その力が無意味なほど微々たるものであったとしても、一人一人の行動規範に「環境や人にエシカルであること」がしっかり根付き、日常の「あたりまえ」の質が高まることは決して意味のないことだとは思いません。そして、今この時に地球上で起こっている問題に対して、「まず知ろう！」と関心を向け、その危機感を冷静に受け止めることが大切なのではないかと考えます。

「何かの犠牲の上に築かれる豊かさを私たちは持続可能とは呼ばない」この考え方を学びの中でしっかり自分の生き方と結び付けていける子どもを育てていきたいと思います。そして、学んだ子どもを通して家庭に、地域にその波が広がっていくことが大切だと考えます。